

Title	十九世紀後半におけるイギリス資本主義の変貌と労働組合運動の変転(その一) : 労働組合運動における日和見主義の発生
Sub Title	The change of British capitalism and the transformation of the trade union movement in the latter period of the 19th century : the origin of opportunism in British trade unionism
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1958
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.51, No.4 (1958. 4) ,p.302(18)- 318(34)
JaLC DOI	10.14991/001.19580401-0018
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19580401-0018

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

十九世紀後半におけるイギリス資本主義 の変貌と労働組合運動の変転 (その一)

—労働組合運動における日和見主義の発生—

飯 田 鼎

- 一、十九世紀後半における資本主義の発展と変貌
- 二、労働諸条件の改善と労働運動の変転
- 三、日和見主義発生の基盤

イギリス産業革命の歴史的意義を洞察したノールス女史は、一八五〇年から一八七三年にいたる二三年間こそは、英国にとって『黄金時代』であったことを強調し、つぎのようにのべている。「一八五〇年から一八七三年にいたる二三年間は、英国は世界の鉄工所であり、世界の運輸業者であり、世界の銀行であり、世界の手形交換所であり、世界の仲継港であった。世界の商工業はこの期間に英国を中心として廻転した。英国は、イタリー、ドイツ並びに米国の

ような他の国が、ようやく国民的組織にとりかかっている頃、すでに世界経済組織ができていた。イタリーは一八五九年までそれそれ関税の障壁を有する八国からなっていた。ドイツは一八三四年によりやく国際関税同盟の端緒を形成したにすぎず、六〇年代にも果してそれを維持することができるかどうかは不明であった。米国は、南、北、中西部と三つの経済的区域に分離し、一八六五年までは、その区域の内に果して一国家が成立するか、あるいはまた二国もしくは三国が形成されるかは不明であった。米国はすでに、連合を破壊する危険のある二大危機にのぞんだ。イングラント人の輝かしい成功は、当時更に個人の発意と企業の価値と自由貿易政策の賢明さを証明するように見えた」と。

ノールスが見事に描いているようなイギリス資本主義の繁栄は、

この国が世界で最初に産業革命を経験し、列国に先立って資本制度を確立することによって、世界市場における独立的地位を獲得したという事実を負うていたけれども、また十九世紀初頭から約五〇年におたる労働者のほげしい階級闘争が、この時代になってようやく波静かな様相をおびはじめたということをも意味した。実際「はじめな三〇年代」にはじまり、「飢餓の四〇年代」をへて、一八四八年以後のチャーチスト運動の没落をもって終りをつけた労働者階級による革命的な政治運動は、相対的安定期に入った一八五〇年代になると、次第に影をひそめ、労働者階級の関心は次第に政治闘争からはなれ、熟練工による全国的な職業別組合という労働組合運動の「新し型」(The New Model)を生ずるに至った。もはやチャーチズムは労働者階級の運動の主流でなくなり、小さな地方的な労働組合 (The Local Craft Club) や、初期の不安定だが戦闘的な産業別組合は、全国的な基礎の上に立つ強固な職業別組合にとつて代られつつあった。云うまでもなく、労働組合の組織型態のこのような変化は、イギリス資本主義の発展と変貌とに照応するものであり、資本主義構造の分析をまっしてはじめてその性格を究明することができる。

十九世紀中葉のもっとも目立った特徴のひとつは、交通機関の革命によって資本主義が市場としてますます単一化されたことであった。一八四三年から一八五三年までの一〇年間に、主要鉄道網が完成し、ロンドンと他の重要な産業地域とを結びつけるに至った。当時

十九世紀後半におけるイギリス資本主義の変貌と労働組合運動の変転

鉄道の建設は一種のブームをつくり出し、すでに一八四三年には英国には約二千哩の鉄道があり、一八四八年には五千哩の鉄道が建設されたといわれる。鉄道網の整備は、英国全体をひとつの国内市場として完成するとともに、それに使用される膨大な鉄鋼と資材は、機械工業と鉄工業に新しい需要をよびおこした。製鉄業の発展は石炭の消費を異常に増大させるとともに、新式にして大型の船舶を建造させるに役立ったのであった。

われわれが十九世紀中葉のこの二〇年間を、「鉄道時代」と銘うつときですら、鉄道建設がこの期の経済発展に似た独自の戦略的な重要性を十分に評価しえないことがよくある。鉄道というものは、おびただしく資本を吸収するという、資本主義にとってにはかなり知れない有利性をもっている。この点にかけては、鉄道にまさるものは近代戦の軍備だけであり、近代の都市建築も、これに比肩することはむずかしい。云うまでもなく、鉄道の建設だけが、当時の英国における投資と重工業にたいする重要性をすべて物語るものではない。しかし十九世紀中葉における投資のうち、かなりの部分が鉄道の建設にむけられたということは注目されなければならない。クラップムによれば、一八五三年に条款をもって登録された株式会社数は三三九で、そのうち約二五%にあたる八〇は鉄道、五四がガス、三五が保険、その他は鉱山業、造船業、貿易業の諸会社であったといわれ、鉄道建設の当時の投資分野における比重の重要性をうかがい知ることができる。だが、われわれがここで

鉄道建設にたいする投資について考察する場合、忘れてはならないことは、対外投資がすでに十九世紀の中葉には無視することができない役割を果していたことである。われわれは資本輸出というものを考える場合、資本主義が独占的段階に到達し、レーニンのいわゆる帝国主義の時代に突入した十九世紀末期から一九一四年に先立つ一〇年間に特徴的な現象として把握するのが普通であり、またそれ自体決して誤りではないけれども、しかしのちにみるような直接投資によらず、主として政府借款の形をとって行われた対外投資は、大部分は鉄道の建設にふりむけられ、それは資本の有利なはけ口を提供するとともに、またイギリスの資本財輸出を刺激するという二重の機能を果たすものであった。⑩ ジェンクスによれば、一八四〇年代にイギリスをおもった鉄道建設のブームは、やがて一八四八年の恐慌となつてあらわれたロンドンの金融市場の増大する危機の状態、穀物および馬鈴薯の飢饉によつてもたらされた緊張などの反映であり、その結果、流通資本が国内および国外における鉄道事業という固定的な弾力性のない形に結びつけられたのであると云っているが、大きな危険を冒すことなくして、しかも巨額の利潤をあげることができるといふ事實は、イギリスの資本家にとつてこの上ない魅力であつたにちがいない。事実、四〇年代のイギリスの鉄道ブームに踵を接して、大陸の鉄道建設がはじまつた。そしてそのつぎには、アメリカの鉄道建設というさらに大きな註文が口を開けて待っていた。⑪ 一八五六年から一八六五年の一〇年間に、三、五〇〇万ポンドの鉄

二〇 (三〇四)

道用の鉄材が海外に輸出され、一八六五年から一八七五年にかけては八、三〇〇万ポンドが積み出された。たんに鉄鋼材ばかりでなく機械類の輸出も増大し、蒸気機関をふくむ機械の輸出は、一八七一年から一八七五年にかけて毎年八五〇万トンに達したといわれる。⑫ そのほかインドはもちろん、ロシア、カナダ、オーストラリアなどにおける鉄道建設は、十九世紀末期まで、その資材および鉄鋼材の供給を英本国に仰いだのであつた。

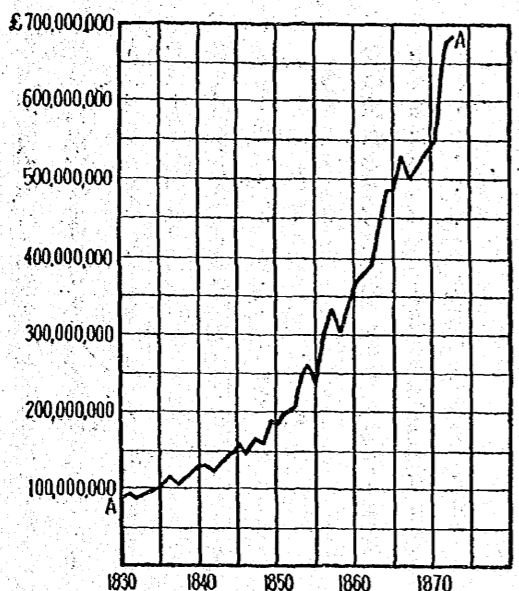
以上においてわれわれは、鉄鋼業を中心とするイギリス資本主義の発展と繁栄について一瞥したが、このような黄金時代は果して永続し得たであろうか。むしろそれは一時的なものであつた。このような異常な繁栄は、シュンペーターの言葉をかりるならば「資本主義の交響楽の残りの楽章のクライマックス」が演奏されるためのものであつたかもしれない。これについてはのちにふれるとして、イギリス資本主義が一八五〇年から一八七三年までの間にその絶頂に達したことはまぎれもない歴史的事実であつた。とりわけ一八五五年に制定された有限責任法 (Limited Liability Act) は、やがて一八六二年の株式会社法 (Companies Act) として体系化された結果、一八五七年、一八六六年および一八七三年の金融恐慌によつて一時阻止されたとはいへ、一八七〇年代には、従来までの個人経営に代つて株式会社型態が、多くの産業において採用されるに至つた。⑬ また一八四四年、ピールによる銀行特許条令 (Bank Charter Act) は、イングランド銀行に優越した地位をあたえ、金本位制度

を確立することによつて、イギリス経済を安定させ、輸出の増大と産業の工展に役立ったのである。

石炭および金属加工工業の発展にもかかわらず、一八七〇年代に織維製品は、イギリスの輸出品のなかでもっとも重要な地位をしめ、たとえば綿製品は輸出のほとんど三分の一をしめ、また石炭の輸出は一八五〇年から一八七二年までの間に価値にして五倍に増大し、機械の輸出は、四倍に増大した。そして同じ期間に、鉄および鋼鉄の輸出は、二五〇%も増加したといわれる。まことに十九世紀後半のイギリスは「鋼鉄の時代」であり、ジョン・ラスキンの言葉をかりるならば、「その時代以来、われらのメリー・イングランドは、鉄の覆面をした人間に變貌した」のである。⑭ イギリス資本主義史上稀に見る黄金時代を現出したこの二〇有余年の限りなき膨脹は、何に由来していたか。アーサー・ボーリー (Arthur L. Bowley) の語るところによれば、大体つぎのような諸事件が原因となり結果となつて未曾有の繁栄がもたらされたのだといわれる。⑮

- 一八三〇年 イギリス最初の鉄道の開通
- 一八三七年 ホイトストーン線の電信
- 一八三八年 最初の大西洋汽船の開通
- 一八四〇年 ニュージブランドへの植民
- 一八四二年 原料にたいする課税の削減
- 一八四六年 穀物法の撤廃
- 一八六〇年 フランスとの通商協定

十九世紀後半におけるイギリス資本主義の変貌と労働組合運動の変転



りおよびオーストラリアなど)との貿易は、一八六〇年から一八七〇年までの間に五〇%も増大した。⑯ イギリス経済は、その空前の好景気をも

二一 (三〇五)

要するにそれが自由貿易主義政策の勝利がもたらしたのであり、「世界の工場」としてのその卓越した経済的な諸条件の所産であつたことは疑いなく。一八五九年から一八六五年までの各国の間に結ばれた通商協定が示したところの進歩は偉大であつたけれども、それらは自由貿易の方向における第一歩にすぎなかつた。そして第二歩はまだとられずにいる。なぜなら関税は例外の場合をのぞけば廃止されなかつた。われわれの商品は外国市場にうけいれられたけれども、しかしそれは、三〇%という最大限の関税のもとにおいてである。一方外国商品は、イギリスへ自由に入ること許されたのである。自然、これらの諸国(フランス、ドイツ、アメリカ合衆国、ベルギー、ロシア、スウェーデンおよびノルウェー、イタ

たらし一八七三年まで、どれほどいぢるしい発展をとげたかは、その貿易額の増大によって知ることができる。⁽²¹⁾かくしてベンサム主義に基礎をもつが、しかし自由放任の経済学によって支えられたともいへべき個人主義は、一八八〇年頃までひきつづいて大部分のイギリスの文筆家および思想家の政治的信条であった。⁽²²⁾しかし、永遠にわたって真理と考えられた経済的自由主義、繁栄と進歩として幸福をつねにもたらすとされた自由貿易政策は、イギリス資本主義がその絶頂に達したとたんに、すでにその破綻を胚胎しつつあった。けれども、一八七三年にはじまり、一八八〇年と一八八八年の俄か景気によって中断され、九〇年代の中頃までもつづいた大不況が到来するまでは、労働者階級もイギリスの産業的独占から生ずる超過利潤のわけ前にあずかることができ、従って労働組合運動も、資本主義社会の機構の枠内にとどまる穏健な合法主義におちいった。「ヒュー・モデル」とはすなわちこれである。

- 注(一) L. C. A. Knowles; *The Industrial and Commercial Revolutions in Great Britain during the Nineteenth Century*, 1924, p. 139. 川西正鑑訳『産業革命史論』(文雅堂、昭和三年)二二三頁。
 (2) A. L. Morton; *British Labour Movement*, 1936, p. 105.
 (3) Morton; *ibid.*, p. 100.

- (4) G. M. Trevelyan; *English Social History, A Survey of Six Centuries, Chaucer to Queen Victoria*, 1946. 林健太郎訳『英国社会史(下)』(山川出版社、昭和二十五年)七三一―七四頁。
 (5) Knowles; *ibid.*, p. 132. 邦訳二〇九頁。
 (6) Knowles; *ibid.*, p. 132.

製鉄業の発展は、石炭の消費と密接な関係がある。それが石炭の生産を異常に刺激したことは言うまでもない。すなわち、一八五四年に石炭の産出高は六四、六六六、〇〇〇トンであったものが、一八七〇年には、一一〇、四三二、〇〇〇トンに増大した。

- (7) Maurice Dobb; *Studies in the Development of Capitalism*, 1946. 京大近代史研究会訳『資本主義発展の研究』II 一一五頁。
 (8) J. H. Clapham; *An Economic History of Modern Britain, Free Trade and Steel, 1850-1886*, 1932, p. 357.
 (9) Dobb; *ibid.*, 邦訳『前掲書』一六頁。
 (10) Dobb; *ibid.*, 邦訳『前掲書』一六頁。
 (11) Leland Hamilton Jenks; *The Migration of British Capital*, 1927, pp. 152-153.
 (12) Dobb; *ibid.*, 邦訳『前掲書』一六頁。
 (13) Dobb; *ibid.*, 邦訳『前掲書』一六頁。

- カ南北戦争ののち、もっとも偉大な躍動がおこった。そのとき鉄道は、多くの国々、とりわけアメリカ合衆国で建設されつづけた。一八七三年から一八七四年にかけての、世界的規模の商業上の沈滞ののち、その世紀のもっとも大きな頓挫がおとされた。一八八〇年とともに、景気が恢復した。そして最後に、英国の鉄道でたつするアメリカの購入がおこった』と。(Clapham; *An Economic History of Modern Britain*, p. 227.)
 (8) Jenks; *ibid.*, p. 174.
 (14) Schumpeter; *Capitalism, Socialism and Democracy*, 1949.

- 中山伊知郎、東畑精一共訳『資本主義、社会主義および民主主義』(上) (『東洋経済新報』一九五頁)。
 (5) G. D. H. Cole and R. Postgate; *The Common People, 1746-1946*, 1956, p. 334.

- (16) クラッパムはつぎのように述べている。
 「有限責任の株式組織がもつ多くの利点は、ウィクトリア時代の産業指導者が、少ない危険でその事業を拡張しようと思つたとき、そしてまた年老いたとき、とくに彼等をひきつけたのである。一八七七年、すぐれた投資代理店がつぎのように説明した。「ある事業に利権をもっている人々は、その利権を制限しようとする欲望をあらわす。そしてそれをしようとする唯一の方法は、株式会社をつくろうとすることによるのである。」(Clapham; *op. cit.*)」

十九世紀後半におけるイギリス資本主義の変貌と労働組合運動の変転

- pham, *ibid.*, p. 138.)
 (17) Cole and Postgate; *ibid.*, p. 338.
 (8) John Ruskin; *The Seven Lumps of Architecture, 1880* (quoted into Clapham's, p. 47).
 (9) Arthur L. Bowley; *A Short Account of England's Foreign Trade in the Nineteenth Century, its Economic and Social Results*, 1933, p. 54.
 (20) Bowley; *ibid.*, p. 62.
 (21) 前掲かかげた表は、一八三〇年代から一八七〇年初頭までの輸出入総額の飛躍的な増大を示している。(表はA.L. Bowleyによるものである。)

- (22) Ernest Barker; *Political Thought in England*, Herbert Spencer to 1914, 1946.
 堀豊彦、柚正夫共訳『イギリス政治思想Ⅱ—H. スペンサーから一九一四年まで』(岩波現代叢書、昭和二十九年)一七七頁。

11

「一八二五年から一八四八年までの間の時期は、商業的沈滞の頻繁さと鋭さとがいぢるしかなかった。だが一八五〇年から、産業上の膨脹は、長い間かつてのいかなる時期よりもより大きく、またより確実に進んだ。繁栄のこれらの数年間のうちに、労働組合の世界が組織の『新しい型』をとりいれたのであって、つまり労働組合運動は

その組織のもとに財政的な強さ、有給の練達した職員、そしてそれまでは知られなかった組合員たることの永続性をえたのである。」

このような「新しい型」の労働組合運動が、何故に十九世紀後半のヴィクトリア時代におこったか、少なくともそれがイギリス資本主義の発展と膨脹に照応するものであったことは、さきに指摘したとおりであるが、資本主義の膨脹発展が、イギリスに海外市場にたいする独占的支配をもたらしたという事実と並んで、労働者階級にはさしあたり、労働諸条件の改善という形で現われたこともまた事実であった。つぎにわれわれは、労働組合運動の「ニュー・モデル」を生み出す重要なモメントのひとつとなった労働諸条件の変化について考察するとしてよう。

一八三〇年代から四〇年代にかけてのイギリスの労働者階級の運動は、いくつかの基本的な要求によってつらぬかれていく。しかしそのうちでもっとも重要なものは工場法改革運動と男子普通選挙権の運動であった。後者はいわゆるチャーチスト運動として労働者の革命的戦闘的精神を昂揚せしめたが、この輝かしい運動と並んで、一八〇二年サー・ロバート・ピールによる初期工場立法以来、ロバート・オーエン、J・C・ホップハウス、シャフツベリ伯、M・サドラー、R・オスラーなどの根強い努力と忍耐をもってつづけられた工場法改革運動、なかでも労働時間短縮の運動があった。それは一八四七年、チャーチスト運動がその「最後の閃めき」をのこして没落する一年前に、十時間法として通過成立し、結実した。この十時

間はすでに週五二時間から六四時間であり、煉瓦積み工やロンドン活字工なども同様であった。

またこれと比例して、労働条件のもっともいちじるしい改善の指標として実質賃金の上昇があげられねばならない。一八五〇年から一八七五年頃までの実質賃金の上昇は、多少の変動はあったにせよ、めざましいものがあり、一八五〇年の実質賃金を一〇〇とすれば、一八七六年は実に一三七という躍進ぶりであった。もちろんわれわれは、マルクスが指摘したように、一八五〇年代から六〇年代のイギリスにおいて、工業労働者階級の薄給層としての不熟練労働者が広汎に存在したという事実を、決して無視するものではないけれども、しかし一八五〇年以後七〇年代にいたるイギリス労働者階級の状態は、それ以前の時代に比較して決して悪くはなかった。それよりもむしろ、このような労働時間の短縮や実質賃金の上昇は、当時の労働組合が資本家側に力強い闘争を挑むことによって、獲ち得られたものではなく、いわば資本主義的繁栄の「落ち穂」として労働者階級にわかち与えられたものであり、換言すれば、資本家階級の食卓からこぼれ落ちた「一片のパン屑」にはかならなかったという事実こそ忘れられてはならない。いわゆる労働組合の「ニュー・モデル」とは、ヴィクトリア精神が生み出した一変種ともいべきものであった。ではニュー・モデルの組合はどのようにして成長し、いかなる特徴をもっていたであろうか。

云うまでもなく、ニュー・モデルの組合は、一八五〇年代になっ

十九世紀後半におけるイギリス資本主義の変貌と労働組合運動の変転

間法運動は、チャーチスト運動と交錯し、これに支持されながら進んだのであったが、最初は一八三二年ミカエル・サドラーの指導のもとに、主としてトリー党の人道主義者たちによって行われた運動に端を発したのであった。一八四四年および一八四八年の工場法の特徴は青年男女労働者は、午前五時三十分から午後八時三十分の間に、十時間以上働いてはならないとされ、その時間は仕事を始める最初の時間から計算されるべきであり、また食事のために一時間半の時間があたえられねばならないという点にあった。そして、一八四七年から一八六〇年までの間には、工場立法は、原則的に大きな発展はおこらなかった。ただその時期は、二つの重要な条令によって特徴づけられている。すなわち一八五〇年と一八五三年の条令であって、それははじめに女子、青年および子供にたいする普通労働日 (Normal Working Day) を確立するに至った。つまり一八四八年の工場法は、一八五三年に至ってはじめて、あらゆる保護された人々にたいして、一定の労働日を法律によって確定するという望ましい結果をもたらしたのであって、それ以来工場主たちは、一日に十五時間以上その工場を動かすことはできなくなった。以上のような労働条件の変化は、繊維産業をはじめとして他の産業にも支配的な現象となり、労働時間短縮への動きとしてたとえ土曜日の半日休暇制が規則となった。工場法の適用をうけたことのなかった建築業も、一八六〇年代には交渉もしくはストライキによってそれを獲得しようとした。そしてその当時、大工および指物師の労働時

て突如としてその姿を現わしたものでなかった。度重なる失敗によって、チャーチスト運動が次第に熟練労働者の心をとらえなくなった一八四三年、陶工組合 (Potters' Union) や綿紡績工組合 (Cotton Spinners Association) などをさきがけとして、一八四五年、活字工の全国的な組織が全国印刷工組合 (National Typographical Society) として発足し、また同じ年に強力な装飾用高級ガラス製造工連合組合 (United Flint Glass Makers' Society) が建設された。しかしながら、これらの新しい団体のなかでもっとも重要なものは、一八四一年ウェイクフィールドで結成された大英国家炭坑夫連盟 (Miners' Association of Great Britain and Ireland) であった。この坑夫たちの闘争は、実は当時すでに衰えつつあったチャーチスト運動と密接な関係にあった。全国的規模にわたって展開され、労働者に政治的意識を鼓吹したこの運動は、すでに年拘束契約 (A System of Yearly Bond) の撤廃と実物給与制の廃止のため、長い間闘ってきた各地の坑夫たちの運動をして、はからずも全国的な基盤の上に立たしめることとなったのである。熱烈なチャーチストで弁護士でもあったロバート (W.P. Roberts) の指導のもとに、盛んな活動をはじめた大英国家炭坑夫連盟は、ダーラム、ノーサンバーランド、ランカシャー、ヨークシャー、スタフォードシアおよびスコットランドにおこった地方組合の上に立ち、アイルランドをもその勢力範囲として、五十三人もの有給の組織者をおいて、英国中のあらゆる炭坑を訊ねさせ、一時はその組合員数は十万

人にも達したといわれる。かくしてここに、イギリス労働組合運動史上最初の、全国的な規模による強力な職業別組合が発生したのであって、これこそいわゆるニュー・モデルの組合の先駆的型態であった。注意すべきことは、それが最初から戦闘的精神を喪失していたのではなく、むしろ一八四七年から四八年にかけての経済的危機と革命の年に衰亡するまでの数年間の歴史は、果敢な闘争の連続であったといわれる。炭坑労働者によって切り拓かれた全国的な職業別組合への途は、平坦ではなかったといえ、チャーチスト運動の没落につれて、一時は政治的熱狂にさらわれた熟練者層を再びひきつけることとなった。労働運動は政治的革命的傾向をはなれて、チャーチイズム以前の、すなわちオーエンやドハーティの時代に帰るかに見えた。一八四五年、イースターで結成された労働保護全国労働組合連合会 (The National Association of United Trades for the Protection of Labour) はその風潮を暗示するものであり、事実、この労働組合運動復活の目立った特徴は、政治的要求よりは、法的な圧迫にたいする根強い抵抗であった。しかしながら、オーエンの流れを汲んでいたとはいえ、もはや、それは形式だけのものとなり、かのグラント・ナショナルに見られたような戦闘的気格は失われ、従って闘争の手段としてのストライキは低く評価され、オーエン主義の影響は、わずかに協同組合による生産の理念によって代表されたにすぎないものとなった。従ってそれは、オーエンを中心とするグラント・ナショナルのように、職業別組合の組織に代るに、

労働組合総連合 (General Trades Union) の構想をもってしようというものでなかった。イースターにおける会議は、ロンドンの各職業別組合だけでなく、ランカシアの坑夫や織維労働者、ヨークシアおよびミッドランドのメリヤス工および毛織物工、そしてさらにマンチェスター、シェフィールド、ノーウィッチ、ハル、プリストル、ロッチデールおよびヤーマウスなどの諸都市の労働組合などをあつめて開かれた。さきこのべたように、この会議が、一八三〇年から一八三四年にわたるオーエン主義の復活のような型態をとりながら、その性格が、いちじるしく異なった、いわばヴィクトリア的なものであったことは、それがかのグラント・ナショナルのように包括的な一大組合ではなく、独立の職業別組合の連合であったという事実からも明らかであろう。彼等は、この会議の目的が、雇主とのよりよき了解に達するため、両者の間に介在している偏見を除くために、あらゆる努力を惜しまないことを主張し、またそれこそ彼等の労働条件を向上させる唯一の途であると考えたようである。彼等は、オーエン主義者たちのように、労働組合をもって、生産手段を資本家の手から解放して労働者階級の手へ帰せしめようなどとは考えなかったばかりか、労働組合の階級協調的な役割を重視し、労働組合は社会主義をすてて、むしろ労資間の紛争処理機関として甘んずべきことを強調したのである。そしてそのような意図のもとにさきの労働保護全国労働組合の姉妹団体として誕生したのが、全国労働雇用連合協会 (The National United Trades Association

for the Employment of Labour) であった。かくしてこの二つの団体は、一八四五年のその創立以来並行して存続したが、その労資協調、階級調和的な方針にもかかわらず、資本家の圧迫はきびしく、とくに二八四七年の恐慌と偉大な支持者ダンカム (Thomas Slingsby Duncombe) の隠退によって大きな打撃をうけ、一八四八年二つの団体をひとつにしてしようとする努力も空しく、次第に衰えていった。このように、一八四〇年代にはじまった労働組合運動は、その機構や目的において、一八三〇年代の革命主義的な傾向と、一八六〇年代にはじまった議会主義的な行動との過渡的な存在であり、その穏健なしかも攻撃的でない政策こそ、新しい精神のひとりのあらわれにすぎなかった。そしてこのような徐々に芽生えはじめた新しい精神、新しい時代の雲間気のなかからこそ、ヴィクトリア的組合の典型と呼ばれた合同機械工同盟が成長していった。

- 注(一) S. and B. Webb; History of Trade Unionism, pp. 180-181.
- (二) B. L. Hutchins and A. Harrison; History of the Factory Legislation, 1911, pp. 43-70.
- (三) F. Engels; Die Lage der Arbeitenden Klasse in England, 1844.
- マルクス・レーニン主義研究所訳 (大月書店) 二二五頁。
- (四) Maurice Walter Thomas; The Early Factory
- 十九世紀後半におけるイギリス資本主義の変貌と労働組合運動の変転

賃金、物価および失業 (1850=100とする)

年次	小売価格	名目賃金	実質賃金	失業率 (%)
1850	100	100	100	96
1851	97	100	102	96
1852	97	100	102	94
1853	106	110	105	98
1854	122	114	96	97
1855	126	116	95	95
1856	126	116	96	95
1857	119	112	96	94
1858	109	110	102	88
1859	107	112	104	96
1860	111	114	103	98
1861	114	114	100	95
1862	111	116	105	92
1863	107	117	109	94
1864	106	124	117	97
1865	107	126	117	98
1866	114	132	116	97
1867	121	131	109	93
1868	119	130	110	92
1869	113	130	115	93
1870	113	133	118	96
1871	113	133	121	98
1872	120	146	122	99
1873	122	155	128	99
1874	117	156	133	98
1875	113	154	135	98

- よび失業にかんする統計である。
- この表は一八五〇年から一八七四年までの、賃金、物価および失業にかんする統計である。
- (五) Hutchins and Harrison; *ibid.*, p. 96.
- (六) Hutchins and Harrison; *ibid.*, pp. 111-112.
- (七) Clapham; An Economic History of Modern Britain, 1850-1886, p. 448.
- (八) G. D. H. Cole; A Short History of the British Working Class Movement, 1952, p. 272.
- (九) Karl Marx; Das Kapital, 第二十三章 資本制的蓄積

の一般的法則、長谷部訳第一部(下)一〇〇二頁以下。

(10) エンゲルスは、つぎのように云っている。

「機械工、大工および木工、建築労働者は、それぞれ独立した一勢力であり、しかもきわめて強大であるので……、彼等の状態は、一八四八年以来うたがいのなくいよいよ改善して来た。そのことのもっともよい証拠は、十五年以上もの間、彼等の雇主が彼等に極度に満足してきただけでなく、彼等自身も彼等の雇主に極度に満足してきたことである。彼等は、労働者階級のうちの貴族をなしている」と。(エンゲルス、イギリスにおける労働者階級の状態、邦訳五〇〇頁。)

(11) Webb; History of Trade Unionism, p. 181.

(12) Webb; ibid., p. 181.

(13) Page Arnot; A History of Scottish Miners, 1935, p. 38.

(14) 年拘束契約によれば、労働者は来る一年間、他の者のために働かないという義務を負う。ところが炭坑主の方は、労働者に仕事をあたえる義務を全然負わないので、労働者は数ヶ月も仕事がないことが度々ある。そして、労働者がどこかで仕事をさがせば、職務怠慢のかどで、六週間、踏車をふみにやられるところであった。(Hammond; The Skilled Labourer, 1920, p. 12.)

(15) ロバートは弁護士であるとともに、熱烈なチャーチストで

あった。フィアガス・オコンナーと親交があり、チャーチストの裁判に活躍すると同時に、炭坑夫の年拘束契約や実物給与制度反対のための闘争を支援した。(Webb; ibid., p. 182. エンゲルス、前掲書邦訳、三七八—三八〇頁。)

(16) Webb; ibid., p. 182.

(17) Engels; ebendorf, 邦訳三八三—三八七頁。

(18) Webb; ibid., p. 182.

(19) Webb; ibid., p. 190.

(20) Webb; ibid., p. 189.

(21) Webb; ibid., p. 188.

(22) G. D. H. Cole and A. W. Filson; British Working Class Movements, Select Documents, 1789-1875, 1951, p. 469.

この団体の創立総会において決定された規約の第三条には、「つぎのような文句が見られる。「この団体の主要な目的は、働きの二つの部分にわかれる——その第一は対外的なことで、労働者階級 (the industrious classes) の状態について、立法機関の勢力に關係をもつこと、また第二には、労働諸条件を改善しようとして組合が行う努力に關係すること」と。

(23) ダンカムは自由党员であったが急進主義者であり、チャーチスト運動に深い理解と同情をもっていた。彼は一八四二年のチャーチスト請願を議会で提出して賛成演説を行ったほど

で、終生、労働者階級の味方であった。彼はしばしばその当時の貴族的な煽動家として現われたが、その労働組合運動にたいする貢献は無視することができな。 (Webb; ibid., pp. 187-188.)

(24) Webb; ibid., pp. 195-196.

三

合同機械工同盟をもって代表されるいわゆるニュー・モデルの組合は、一体どのような特徴をもっていたか。まず第一に、構造としてそれは全国的な職業別組合の形をとり、組合員たるべき者は、その産業において特定の徒弟期間を修了した熟練労働者だけにきびしく制限されていたこと。第二に、それは全国的な事務所と本部をもち、その職権がなければ地方支部は、ストライキを呼びかけることも、規則に特別に定められていないどんな方法でも、金を費すことを禁じられたのであって、その意味で権力が強度に集注化されていたこと。そして第三に高額の組合費——たとえば週一シリングにも達した——その基金はストライキ手当のほか疾病手当、しばしば、送葬手当、失業手当など種々の目的のために使用された。さらにそのきわめて重要な特徴として、ストライキは組合の財政的な安定を危くするという理由のもとに、奨励されず、従って産業上のみならず共済組合に墮したことであった。

合同機械工同盟は、実は比較的長い歴史をもち、一八二六年に創立

十九世紀後半におけるイギリス資本主義の変貌と労働組合運動の変転

ランカシア地方およびロンドンを中心としておこったこの争議

は、三ヶ月もつづき、それ以前のどのストライキよりも一般の関心をひいた。キリスト教社会主義者たちが労働組合を援助し、一般大衆からの四千ポンド、他の組合からの五千ポンドの寄附を集めたにもかかわらず六カ月の間に失業手当として四万三千ポンド以上が支出されたため、資金は欠乏し、屈服せざるをえなくなった。雇主側は、労働組合への加入を拒否する、かの悪名高き文書（“do not heat”）に署名することを労働者に要求して譲らず、ついに合同機械工組合は雇主側の条件に同意するを決定したが、しかし組合を捨てるという約束は果さなかった。一八五二年のこの争議は、合同機械工同盟の建設によって、労働組合運動史の上で転換期をなしたが、それは一方における資本家の勝利であったと同時に、他方において、合同機械工同盟に労働組合運動の世界における比類のない卓越した地位をもたらすという結果を生んだのである。すなわち、この争議の敗北は、たしかに合同機械工同盟をして戦闘主義的傾向を拭拭して、現状肯定の日和見主義への政策的転換をなさしめたのである。以上においてわれわれは、ウィクトリア型組合の典型とも云うべき合同機械工同盟の生成と発展、そしてさらにその特徴について概観したが、このような機械工同盟を中心とするニュー・モデルの組合の政策は、ロートシュタインの言葉をかりるならば「機会主義」(Opportunism)をもって特徴づけられる。彼等の日和見的労働貴族的政策は、ウェップ夫妻によってジャンタ (Janta) と名づけられた一群の指導者たちによってうち出されたのであった。合同機械

工同盟のウィリアム・アラン (William Allan)、合同大工組合のロバート・アップルガース (Robert Applegarth)、鉄工組合のダニエル・ガイル (Daniel Guile)、煉瓦積み工のエドウィン・クイルソン (Edwin Coulson)、靴工組合のジョージ・オッジャー (George Odger) の五人が中心となったが、そのほかに有名な指導者としては、クリーマー (W. R. Cremer)、ジョージ・ハウエル (George Howell) およびジョージ・シフトン (George Shipton) 等がいた。ニュー・モデルの組合の指導者として、これらの人々が重要な地位をしめるようになったのは、ウェップ夫妻によればつぎのような事情によっていた。「合同機械工同盟のような巨大な職業別の共済組合の確立は、経営や財政などの複雑な問題に直面して、労働組合の役員の新しい学校をつくり出した。ロンドンにそれらの組合の本部がおかれたため、その有給職員たちは、相互に個人的に親しい関係に入った。そしてこれらの数年間に、書記の小さなサークルは、目立った性格や才能の人々をそのなかに入れたのであって、彼等はその経験と気性によってはげしい危機をのりきって、見事に運動をみちびくに適していた人々であった。」ニュー・モデルの組合の指導者としてのジャンタが労働組合運動において次第に大きな比重をしめるようになったのは、一八五〇年代から一八六〇年代の間であったが、しかしそれはまた当時の唯一の強大な勢力というわけではなかった。イングランド北部には、なおかつてのチャーチスト時代の戦闘的精神をもった多くの組合があつて、ジャンタの支配に

服しなかつたからである。ジョージ・ポッター (George Potter) を代表者として、「ビーハイブ」(“Beehive”) という組合新聞によつたこれらの組合は、戦闘的ではあつたけれども、原則的にはもはやそれほどジャンタと異なつていなかつた。やがてはジャンタの支配に服すべき運命にあつたのである。要するにジャンタの政策はニュー・モデルの組合の性格の反映にほかならなかつた。

ジャンタの政策の第一の特徴は、労働組合の役割についての軽視である。実際彼等の政策は、もっとも有利な雇主が、自発的に許す意志のある条件を、あらゆる労働者に確保することに限られており、戦闘的労働組合主義とはまったく無縁であつた。彼等にとつて労働組合とは、商品としての労働力を雇主側にもっとも有利な条件で売り渡すための独占的な機関にすぎなかつた。彼等は労働組合運動をもっともせまい経済主義の枠のなかに閉じこめた。ジャンタの政策における更に大きな特徴は、その政治的日和見主義であつた。だがジャンタが政治的な態度において日和見的であつたということ、は、彼等が政治にたいしまつた無関心であつたという意味ではなく、それどころか彼等は政治に深い関心をいだいた。云うまでもなく彼等のいわゆる政治とは、チャーチストたちが考へていたような意味でのそれではなかつた。たとえば彼等は、チャーチストのよ

うに、労働者を代表する政党を結成する意図を有していたのではなく、当時の支配階級を代表していたホイッグおよびトリー党に接近することによつて、組合の利益と安全とを固ろうとしたのである。たといは彼等は、チャーチストのよ

日和見主義であり、従って労働組合の戦闘的性格を軽視して、雇主の許す条件を労働者に確保するという消極主義におちていった。だがジャンタの政策は、革命的な行動にたいする恐怖の念をとりのぞくに、支配階級をして労働組合の組織にたいする恐怖の念をとりのぞくに役立ったことも事実であった。労働組合は新たな発展をみせ、すでに地方的な労働組合 (Trade club) の間では、争議の際は相互扶助をすることが慣習的となっていたが、一八五八年から一八六七年までの間に永続的な労働組合会議 (Trades Council) が各地につくられるにいたった。ニュー・モデルの組合は、職業別の全国組合の体裁をとっていたため、それぞれの職業の間には緊密な連絡がなかったのであるが、労働組合会議の建設によって、各職業別労働者の間の相互扶助が、より組織的になされるようになり、労働組合運動はより鞏固な基礎の上にすえられたのである。グラスゴウに於いて建設された労働組合会議は、やがてシェフィールド、リヴァプールおよびエジンバラにも組織され、ついに一八六〇年にロンドン労働組合会議がつくられ、急速に全国的に主要な団体となった。一八六一年、ジョージ・ハウエルが書記長となり、翌年ジョージ・オッジャーによってひきつがれたロンドン労働組合会議には、一八六四年頃にはまったくジャンタによって支配され、機械工、大工、製鉄工および煉瓦積み工などの巨大組合が加入し、それらの組合の指導者の連合委員会の御を呈した。ロンドン労働組合会議の建設は、たしかに重大な事件であった。それは軍隊がストライキを妨

害しないように、政府を説得することに成功したし、また大工合同組合のような巨大な組合の建設をも促したのであった。

ジャンタを頂点とするヴィクトリア型組合は、たしかに労働貴族的な色彩をおび、政治的日和見主義と組合運動における妥協的性格をもって特徴づけられるのであるが、そのなから、全国のあらゆる労働組合が危機におちいたとき、指令と援助をあたえる重要な機関としてのロンドン労働組合会議を生み出したことは、大きな成果であった。それと同時に記憶されなければならないことは、一八六四年、ロンドンにおいて国際労働者協会、いわゆる第一インターナショナルが結成されたことである。イギリスの労働者階級は早くから国際的連帯の精神にめざめ、チャーチストのなかにもその精神は脈々と生きていたが、第一インターナショナルの成立こそは、労働者階級に社会主義を復活し普及する役割を果たしたものであった。この意味において、一八五〇年代に支配となったニュー・モデルの組合運動は、それ以前の「チャーチストの時代」と、それ以後の大恐慌にはじまる「新組合運動」との間の中間的過渡的な運動であったということができよう。(未完)

注(1) Morton; The British Labour Movement, *ibid.*, p. 106.

(2) Allen Hutt; British Trade Unionism, A Short History, 1952. 塩田庄兵衛訳二九頁。

(e) 一八五一年に作成された、合同機械工同盟の規約への序文には、この組合の性格を反映して、つぎのような興味深い文句が見られる。

- 「そしてこれこそ、いままで存在していた組合のなから、合同組合が建設された所以である。その結果として、彼等の異なった利益はよりよく保護されるかもしれない。そしてその主要な特徴は、『必要に応じて相互扶助を行うこと』、『その恩恵を相互に享有しうるように労働条件を制限すること』、『そしてまた』われわれの職業において剰余労働を防止するよく統制された組織をつくること』であるから、『自信をもって、それこそわれら労働者仲間の注意に値するとういうことができる』(James B. Jefferys; Labour's Formative Years, 1948, pp. 30-31.)
- (4) Th. Rothstein; From Chartism to Labourism, Historical Sketches of the English Working Class Movement, 1929, p. 183.
- (5) Webb; History of Trade Unionism, p. 233.
- (6) Webb; *ibid.*, p. 233.
- (7) Morton; *ibid.*, pp. 108-109.
- (8) Webb; *ibid.*, pp. 240-241.
- (9) ターラムの炭坑労働組合の指導者トミー・ラムズン(Tommy Ramsey)は『このよきな誌をつへった』(Morton; People's History of England, 1951, p. 442.)

“Lads unite and better your condition. When eggs are scarce, eggs are dear; When men are scarce, men are dear.”

また一八五一年四月十二日のザ・オムラティブ紙は、ウィリアム・ニキートンの論文「労働の価格をどのようにして規制するか」を掲げたが、そのなかで、つぎのように云っている。

「労働の賃金は、失業している人々の数と、労働者自身の間に存在している競争の量によって影響をうける——従って失業者の数が減少し、それによって競争がうち破られるのでなければ、賃金が増加したり、あるいは特権が増大することもできない。それゆえ、労働市場における余剰労働力をなくすることこそ、労働組合の第一の目的でなければならぬ」(Jefferys; Labour's Formative Years, p. 34.)

- (10) ジョージ・ハウエルとジョージ・オッジャーが中央委員会委員となり、またクリーマーは名誉書記長となり、とくにオッジャーの如きは中央委員会議長になっている。(大月版マルクス・エンゲルス選集第十一巻「第一インターナショナル」二〇—二二頁参照。)
- (11) Webb; *ibid.*, p. 240.
- (12) Morton; *ibid.*, p. 126.
- (13) これは一八六七年につくられた労働組合会議(The Trades Union Congress)の前身であった。

(14) Webb: *Ibid.*, p. 245.
 (15) フランス革命以来、イギリスの労働者階級は、大陸とくにフランスの社会主義運動から深い影響をうけた。一八三八年、チャーチスト、ジュリアン・ハーニー (Julian Harney) は、民主協会 (Democratic Association) を結成したが、やがてそれは同胞民主協会 (Fraternal Democrats) によって代ら

れた。チャーチストの左翼の人々と、ヨーロッパからの政治的亡命客は、この団体で相互に相識した。ハーニー、ジョンズ (Ernest Jones)、オブライエンやマルクスおよびエンゲルスもこれに協力したのであって、この運動は、やがて第一インタナショナルへの途を開いた。

—一九五八・二・八—

西アフリカ・マーケットティング・ボードの安定政策と基金

矢 内 原 勝

- 1 マーケットティング・ボード
- 2 生産者負担額
- 3 安定概念
- 4 生産者価格安定
- 5 基金枯渇の問題
- 6 生産に対する影響
- 7 交易条件
- 8 貿易差額
- 9 ボンド資産と経済開発問題
- 10 マーケットティング・ボード

西アフリカ・マーケットティング・ボードは英領西アフリカ—ただし現在では英連邦内の独立国ガーナを含む—に設立されている。若干の輸出生産物についての買付および輸出に関する独占体である。マーケットティング・ボードには次のようなものがある。

西アフリカ・マーケットティング・ボードの安定政策と基金

- 〔ナイジェリア〕
- ナイジェリア・中央マーケットティング・ボード
- 北部地域マーケットティング・ボード
- 東部地域マーケットティング・ボード
- 西部地域マーケットティング・ボード
- 南カメルーン・マーケットティング・ボード
- 〔ガーナ〕
- ガーナ・ココア・マーケットティング・ボード
- ガーナ・農産物・マーケットティング・ボード
- 〔シエラ・レオン〕
- シエラ・レオン・農業・マーケットティング・ボード
- 〔ガンビア〕
- ガンビア・オイル・シード・マーケットティング・ボード

右にみられるように、ナイジェリアを例外として、ボードは輸出生産物別に編成されている。ナイジェリアも以前には、ココア、落